

近世後期女性読者の識字傾向に 関する一考察

永井悦子

【キーワード】近世 識字傾向 漢字 女子用往来

1 はじめに

近世後期の戯作は前期のそれに比べ、多くの童幼婦女の読者を獲得したと言われる。

たとえば、為永春水「処女七種」(天保7/1836年)における「近來 僕ちかごろやつがれが綴つづりし人情本ちゆうほんにて、当世えどことばの江戸詞しよこくを諸国の娘御達むすめごたちにも大方おほかたは読み覚え給よひし由おほなれば」^[1]という記述などは、作者による多少の誇張があると考えても、その流れが江戸などの都市に限らず、地方へも広がりを見せていたことを十分に感じさせるものである。

近世後期における読者層の拡大については、寛政の改革以降の出版界、つまり作品の送り手側における作者層や作品内容等の変化、また作品の受け手側である庶民層をとりまく経済的、文化的環境の変容といった種々の観点からこれまで論じられてきている。そうした読者層の拡大を促したであろうさまざまな要素のなかで見逃すことのできないものの一つに、庶民層における識字教育の普及が挙げられる。上に例として引いた人情本をはじめ、大量の戯作類が流通し、出版活動が商業として成立していたという事実は同時に、当時広く庶民の間に文字を読むという土壌が整いつつあったことをも示しているといえよう。

こうした近世期の庶民層における識字傾向については、近年、歴史学、特に教育史や女性史等の分野で研究が進められているものの、日本語学的なアプローチによってその実態を解明しようとする動きは未だ少ない。近年、近世期資料を対象とした文字表記研究が盛んに行われ、多くの成果が蓄積されているが、そのほとんどが戯作類をはじめとした文学作品についての調査である。そうした際に明らかにされるのは、主に作品の送り手側の意識であり、読み手の側にどれほどの文字に対する知識があったのかという観点からの考察は少なく、今後調査を蓄積していく必要があると思われる^[2]。

そこで小稿では、本を読む人々のひろがりを支えた識字教育、ひいてはそれによって備わったであろう読者層の識字傾向を探る手がかりの一つとして、当時の手習い教材の実態を考察していきたいと思う。今回は、当時の手習い教材のなかでも特に女子用に編まれた「消息型往来」^[3]を資料として、当時の女性読者の識字傾向について考えてみたい。「消息型往来」は、当時手習い教材として、また日常とりかわされた消息文作成の雛形として使用されたもので、流通した板種も多いことから^[4]、この種の往来が当時ものを読み書きし

た女性たちに与えた影響は少なくないと考えられる。今回、教材を資料としたのは、広範囲に及ぶ読者層を絞り込み、個人的な振幅を捨象し、当時本を読んだ女性たち⁽⁵⁾に備わっていた、また備えておくべきだとされていた文字群についての大枠がつかめるのではないかと考えたためである。

2 女子用消息型往來の資料性について

近世における女性の識字傾向については、寺子屋への就学者数の低さ⁽⁶⁾や儒教思想に根ざした忍耐・犠牲的精神を説く女訓書類の存在が影響してか、これまで概して低いものと考えられることが多かったようである。しかし、実際に女性に向けて編まれた教訓書を見ていくと、「いろは」はもとより漢字の知識を備えることまで求めるものが多いことがわかる。たとえば、貝原益軒『和俗童子訓』（宝永7/1710年）の巻之五「女子を教ゆる法」⁽⁷⁾には次のような記述がある。

七歳より和字をならわしめ、又おとこもじ（漢字）をもならわしむべし。（中略）又、女子も、物を正しくかき、算数をならうべし。物かき・算をしらざれば、家の事をしるし、財をはかることあたわず。必ずこれを教ゆべし。

また、女子用の書札礼のなかには、「女文章はめづらしき字をかくべからず仮名文字にてかく最やさしき也仮名にはもとよりかきやうのさほうあるなれば仮名づかひを心え有べし」⁽⁸⁾というように、しばしば女性が漢字をしたためることをたしなめる記述がみうけられる。この種の指摘は、一見すると先に挙げた漢字を学ぶことを奨励する教訓書類と矛盾するようにみえる。しかし、書札礼の中にこうした項目が存在するという事は、逆に漢字の使用をことさらに禁じなければならないほど漢字に通じていた女性が少なくなかった、もしくは消息をしたためるような階層であれば女性にまで浸透していた漢字群が存在していたという事実を物語っているようにも思われるのである。実際、庶民層のなかにも日々の記録を付けていた女性⁽⁹⁾や旅日記を残した女性⁽¹⁰⁾も少なくないようである。また、農民のなかでも経済的に余裕のある家庭であれば、娘をお屋敷奉公に出すことがあったという事例なども報告されており⁽¹¹⁾、自由に読み書きのできる女性はさまざまな階層に広がっていたことがうかがえる。小稿で取り上げる消息型往來は、このような文字を書くことを学ぶ機会を得た女性たちの礎となった教材の一つだと考えられる。

先にも触れたとおり、消息型往來は、当時の手習い「教材」であったという点において、女性たちが実際に学んだ文字群や、また学ぶべきだと考えられていた文字群の大枠を探るのに適した資料だと考えられる。さらにもう一点、この資料からは、当時の女性の言語生活における重要な一面をうかがい知ることができる。それは、女性の言語生活のなかで大きな位置を占めていたであろう消息文における文字使用の実態である。「消息型往來」は、年中行事や冠婚葬祭に際しての挨拶、書籍をはじめとする物品の貸し借り、花見の誘い、病人の見舞いなど、さまざまな生活の場面に応じたさまざまな消息文例から構成されている。この種の往來が流通した背景には、消息をしたためることが当時のある階層に属した女性たち⁽¹²⁾の日常生活には欠かせないものになっていたという事情がある。消息

文が他者への伝達を目的とした言語行為であることを考えるとき、当然そこには、やりとりを交わす相手方にも理解されるよう配慮した文字群を選択するという意識が働いたと考えられる。つまり「消息型往来」に用いられた文字群は、消息文をとりかわすような階層にあった多くの女性たちが容易に理解し得た、あるいは理解されるべきだと考えられていた文字群であった可能性が高いといえるのではないだろうか。

以下、こうした消息型往来の性格をふまえ、具体的な様相を探っていくことにしたい。

3 消息型往来における漢字使用

本節では、女子用の教材における漢字使用の諸相について、近世後期に戯作者が編んだとされる以下3種の女子用消息型往来の調査をもとに報告したい。いずれも「往来物分類集成Ⅱ 女子用往来編」(1994、雄松堂フィルム出版)に収められているマイクロフィルム版をテキストとして使用した。適宜、先行研究で明らかにされている戯作類の漢字使用の実態と比較しながら考察する。

『婦人手紙之文言』(以下『婦人』) 十返舎一九作／文政3 (1820) 年

『女雅俗要文』 (以下『雅俗』) 為永春水作／弘化3 (1846) 年

『女中用文玉手箱』(以下『玉手』) 山東京山作／嘉永4 (1851) 年

なお、調査は消息文の形式をとった本文部分に限って行うこととし、目次や柱、頭書や巻末に付された記事や語彙集などは含めない。また本文部分のなかでも各消息文ごとに付された書状番号、題名(「花見月見にさそひにやる文」「返事」など)、注釈番号および注釈、さらに結語、日付、宛名など後付部分も除いた。漢字種の認定は、基本的に「角川新字源」によって行った。

3-1 漢字使用の量的傾向

まず、漢字使用の量的な側面について概括しておきたい。それぞれの総文字数・漢字数は、以下にまとめた通りである。

【漢字数一覧】	漢字数		総文字数
	(異なり)	(延べ)	
婦人手紙之文言	381	2400	6252
女雅俗要文	657	4505	11338
女中用文玉手箱	419	2918	5415
計	825	9823	23005

この結果をもとに、消息型往来3種における漢字含有率(延べ漢字数/総文字数)を求めると、『婦人』38.3%、『雅俗』39.7%、『玉手』53.9%となる。「女文章はめづらしき字をかくべからず仮名文字にてかく最やさしき也」という書札札の言とは異なることがわか

る。矢野準氏が行った近世後期戯作類についての漢字調査¹³では、人情本33.2%、洒落本17.4%、滑稽本16.9%とあり、この結果と合わせてみても消息型往來の数値が決して低いものではないことがわかる。

ただ、消息文には、助動詞や形容詞活用語尾（例：久敷、目出度）が漢字表記されたり、送りがなが省かれたりすること（例：可申上候）が多いという表記上の特徴があるため、これが漢字含有率の高さに影響しているとも思われる。そこで、語表記という点からも改めて漢字使用の量的傾向を見直しておくことにする。漢字表記語率¹⁴を算出してみると、それぞれの数値は、『婦人』53.9%（1981、105）、『雅俗』52.9%（3665、160）、『玉手』67.2%（2427、76）となった（括弧内の数値は、前者が漢字表記、後者が交ぜ書きを示す）。かつて稿者は、今回と同様の調査単位で『奥の細道』の漢字表記語率を算出したことがあるが、その際には48.0%という結果を得た。わずかな調査ではあるが、書札札でたしなめられているものの、漢字で表記されるべきことばが多数存在していたと推測できる。

ただ、バラエティーという点からみると、さして豊かだとは言えないようである。総文字数の多い『雅俗』を除くと、残りの2種での異なりはいずれも400字前後であった。総文字数に比して異なりが増加するのは、教材としての性格を反映してのものだと考えられる。3種合わせても、異なりは825字にとどまる。稿者が以前、近世初期に出版された女子用消息型往來5種について同様の調査¹⁵をした際には、異なりで873字という結果を得ており、この種の教材で必要とされた漢字種は1000字内外に収まるという見当がつけられるのではないかと思われる。

3-2 使用漢字とその用法について

まず、使用率¹⁶の高いものを100字まで挙げると以下の通りになる。3種いずれの往來においても「御」「候」の使用率が格段に高く、この2字だけで全体の1割に達する。

御	候	上	申	様	事	下	存	被	祝	此	度	入	一	成	出	見	返	遊
方	何	品	日	春	心	可	仰	有	子	目	取	折	中	其	揃	内	文	機
久	敷	年	節	拝	付	迄	程	初	猶	嚙	札	幾	筆	末	嫌	残	得	寿
販	所	寒	共	千	打	歳	障	暑	歎	重	殊	二	皆	扱	座	奉	悦	今
時	思	万	物	參	外	誠	居	伺	家	難	氣	立	山	代	願	聞	寄	伝
産	忝	納	人	玉														

先にも触れた通り、消息型往來は日常のさまざまな場面に対応できるようにという配慮から種々の消息文例を収載し、その折々に必要なことばをともに学べるように工夫されている。そのため、いずれの往來においても「頻度1」「頻度2」の漢字が全体の半数、もしくはそれ以上を占めるという結果になっている。このような点から考えると、以下に示した使用率の高い漢字というのは、どのような消息文にとっても欠くことのできない表現や内容を記すために使用されたものだという想像がつく。例えば、〈御、候、上、申、様、下、存、被、成、遊、仰、拝、座、奉、參、伺〉などは待遇表現に関わるもので、消息文に不可欠の表現として挙げられるだろう。また、付属語〈被、度、可、共〉や活用語

尾〈度、敷、得〉を漢字表記する消息文表記の特徴もこれと同様に考えてよいだろう。また、消息文の構成上欠くことのできない内容として種々の挨拶が挙げられるが、〈日、春、折、年、節、寒、歳、暑、時〉は時候の、〈揃、機、嫌、障、代〉は安否の挨拶に用いられているものである。また、この種の消息文が多くの女性にもされるようになった背景には、当時庶民層に贈答文化の習慣が根付きつつあり、そうした他家との交流を一家の主婦が一手に引き受けていたという事情がある¹⁷⁾。慶祝に関わる語句や「忝^{かたじけな}し」「有難し」といった語句の表記に関わる〈祝、目、出、度、寿、歎、悦〉、〈忝、有、難〉などの多用は、そうした背景をうかがわせるものである。

次に、現代の表記との関連をみておく。まず、「常用漢字表」と比較してみると、異なり825字のうち682字が重なり、143字が表外字¹⁸⁾であった。表外字の割合は17.3%となる。また、雑誌九十種調査や新聞漢字の調査における高頻度漢字との重なりも大きく、漢字使用のバラエティーという面では、現代常用されるものと大きく離れてはいないようである。特に、使用率の高いものほど「常用漢字表」と共通する割合は高く、先に挙げた使用率上位100字中、表外字は〈此、其、揃、迄、嚙、賑、扱、忝〉の8字にとどまった。これらの多くは、指示語や副詞等を表すもので、現代との表記習慣の違いによるものとみられる。

また音訓等の用法についてみると、「常用漢字表」外の読みは圧倒的に訓が多く、例を挙げると下記のようになる。〈酒〉に「ささ」という女中詞の読みを与えるものなどには、女性用の消息文らしさが垣間見られるが、それ以外は近世の戯作などにも登場する読みがほとんどであった。

愛 めでたし 悦 よろこぶ 暇 いとま 敢 あふ 歎 よろこぶ
 宜 よろし 給 たまふ 扱 よんどころ 許 もと 御 お・み
 魂 たま 思 おぼす 支 つかふ 種 しな 酒 ささ 出 いづ
 諸 もろ 序 ついで 是 これ 態 わざ 店 たな 斗 はかる
 能 よく 夫 それ 猶 なを 齢 よはひ 労 つかる

またその他、熟字訓の表記が非常に少ないことも消息型往来の傾向として挙げられようである。試みに『婦人』での例を挙げると以下の通りである。

のどか こよひ けき もはや おじ おば をつれ あすか ひとは こなた たのも ひより
 長閑 今宵 今朝 最早 叔父 伯父 叔母 音信 飛鳥 一入 此方 田面 日和
みまひ したく あやめ なじみ
 見廻 支度 菖蒲 馴染

このうち「常用漢字表」の付表に含まれる〈今朝 叔父 伯父 叔母 日和〉以外の表記も、現代において目にするものが多い。

次に、これまで先行研究で明らかにされている戯作類の漢字使用の実態と対照してみた。まず、矢野(1987)、彦坂(1987)に示されている人情本、洒落本の使用漢字¹⁹⁾とあわせてみると、それぞれ461字(55.9%)、616字(74.6%)が合致した。さらにこれを上位100字に絞ってみると、人情本とは73字、93字が一致し、共通する漢字の割合はさらに増す。

上位漢字のうちで一致をみないのは、人情本では〈候、被、祝、成、可、仰、有、揃、機、拜、迄、猶、嚙、幾、末、嫌、寿、共、打、歳、暑、歎、皆、扱、伝、産、忝〉の27

字、洒落本ではく仰、歳、歛、殊、伺、願、忝)の7字であった。「候」をはじめ、付属語、敬語表現のなど、消息文に不可欠の表現に用いられるものが目に付く。書く際に使用された漢字と読む際に使用された漢字の違いということができよう。

また、用法についてもやや異なる様相をみせる。たとえば、矢野(1987)の人情本についての調査のなかでもっとも頻度が高い「人」字の用法をみると、

人ひと 人々ひと(びと) 人物ひとぶつ 人目ひとめ 不人ふひと品ひら 一人ひとり 二人ふたり 二人連ふたりづれ 田舎人いなかうと
 母人おつかさん 素人しろうと 素人氣ちがね 貴人れいき 主人まをじ 人愛せじ 月下氷人むすぶのかみ 人形にんぎやう 人間にんげん 人相にんさう
 三人さんにん 三四人しごにん 四五人ほうごにん 奉公人ほうこうにん 役人衆やくにんしゆ 客人きやくじん 古人こじん 美人びじん 名人めいじん

とあり、「貴人」のようなあて字的な表記が目につく。それに対し、春水作と言われる「雅俗」における「人」字の用法は、く人々、人、客人、人形、人がら、人伝、名人)となり、あて字的な表記はみられなかった。

通常、消息文をしたためる際に、振り仮名が付されることはない。よって、消息文の書き手は、振り仮名を付さずとも相手方が読みとれることを前提とした表記を選択したと考えられる。戯作等に頻出する臨時的な結びつきのあて字的表記の使用が、ほとんどみられないのはそのためだろう。これも消息型往來の表記上の特徴の一つに数えることができよう。

4 まとめ

以上、近世期の識字傾向を探る一つの手掛かりとすべく、わずかではあるが女子用消息型往來の漢字使用の様相について報告を行ってきた。

女性の消息文は概して、漢字使用が少ないと思われがちであるが、漢字使用の割合は、数値上、戯作類などと比して決して低いものではなかった。近世後期の消息型往來には、金銭の借用を願い出たり、誂えものを注文したりする際の文面など、実用的なメッセージが多く、美的要素を求めなくなったことも影響していよう。ただ、使用漢字のパラエティーはさして多いとはいえず、現代常用されているものと大きく離れるものではなかった。また音訓等の用法も概ね現代と重なり、戯作類にみられるような臨時的な用法はほとんど見受けられなかった。これは、相手に用件を伝達することを第一とする消息文の資料的な特徴によるものだと言えよう。逆に言えば、消息型往來に使用されている漢字の諸用法から、当時読み書きをする力を蓄えつつあった人々の間に定着していた日常的な漢字使用の姿を抽出することが可能だと考えられる。今後、さらにこうした消息手本類に関する調査の範囲を重ね、当時の識字傾向を追っていきたい。

注

- (1) 『処女七種 秋色艶麗』(1915、人情本刊行会) p41
- (2) こうした読者に備わっていた漢字を探る研究として小松寿雄氏の研究を挙げることができる。小松(1987)では、『浮世風呂』における振り仮名の付されない漢字を一覧として提示した上で、「一覧表に現れる漢字は、大部分やさしいものである。これらの漢字は、当時の人がルビなしでたやす

く読めたものではないかと推定される。このように考えれば、ルビなし漢字は、当時の人が共通に習得していた漢字である可能性をひそめている。」と述べておられる。

- (3) 石川謙・石川松太郎編(1973)では、主に教材の編纂目的から女子用往來を「教訓型」「消息型」「社会型」「知育型」の四種に分類する。
- (4) 小泉吉永編『日本書誌学大系80 女筆手本解題』(1988、青裳堂書店)に取り上げられているこの種の往來は、336種におよぶ。
- (5) こうした消息型往來の享受者層は、人情本など戯作の読者層であったと考えられるが、逆に、戯作の女性読者層すべてが女子用往來物の享受者層というわけではない。人情本等には、多数の振り仮名が付されており、かなり広範囲の読者層をみこして出版されていると考えられる。よって小稿では、女性読者層のある一つのグループの傾向を示すにとどまることをここで断っておきたい。
- (6) 石川氏は女性の寺子屋就学数について「ここに示されている数字(※筆者補。『日本教育史資料』による、通学寺子屋総数740,892人のうち、男子が592,754人、女子が148,138人という数値)は、女子教育の普及程度が、男子のそれに比べて、いちじるしく遅れていた、という事実のみをあらわしているのではない。男子の教育が多分に一般文化の習得にかかわっている故をもって「学校」的施設を利用するのが便利だったのに反して、女子の教育は、家庭内部の精神と技能との方面に焦点をすえて体験から体験への移行をこととしていたから、学校教育に倚藉するところがきわめて僅少であった事実をも示唆しているのである。」(石川1973、p17-18)と指摘されている。
- (7) 石川松太郎編『東洋文庫302 女大学集』(1977、平凡社) p11
- (8) 居初津奈『女文章鑑』(貞享5/1688年)
- (9) 紀州和歌山山下には、商家の妻、沼野峯が記した『日知録』が、また相州高座郡羽鳥村の三鶯家文書には、農家の主婦、三鶯はるゝの日記が残されている。この点は前田(1995)に詳しい。
- (10) 柴(1990)によれば、現在所蔵が明らかとなっている近世期女性の旅日記が133種にのぼるといふ。
- (11) 久木幸男・三田さゆり(1981)「19世紀前半江戸近郊農村における女子教育の一研究——武州生麦村『関口日記』から——」『横浜国立大学教育紀要 第21集』に詳しい。
- (12) 天野(1998)によれば、こうした女性たちの階層は、消息文の内容等から判断して、庶民層の中でも中、上層に属する女性たちだと考えられるという。同書第四章に詳しい。
- (13) 人情本(4種)、洒落本(3種)、滑稽本(3種)それぞれの数値とそれらを合わせて求めた平均値が算出されている。ここでは、その平均値を参考に用いている。
- (14) ここでは、漢字表記されている語数を自立語の総数で除したものを「漢字表記語率」として算出した。(その際、ませ書きは「0.5」として計算した。)「語」の単位に関しては、国立国語研究所の行った雑誌九十種調査が採用するβ単位の基準を参考にした。
- (15) 拙稿(2003)
- (16) 『雅俗』の総文字数が多いため、単純に三種の頻度を加えると、『雅俗』の影響が強くなってしまう。よってここでは、各往來ごとに使用率(頻度/総文字数)を求め、その平均値によって順位を算出した。
- (17) 天野(1998)に詳しい。
- (18) 表外字143字は以下の通りである。(使用率の上位のものをから記す。)

此其揃迄嚙賑扱忝嬉禮鶴龜并萬汰弥籠偕龜昌迴凌菖蒲哉難鯉亦堵麵袖貫輝肴惣嘩樽稽箸鯛膳乍馳蔭戴乞只逗聊恙綜逢寔碎嘶梢窺淋椿油籠珍紫忽囉窺哥餅緇斐之句撰丞而蛙雁叶鄙賤濱冥鋪萩鳴誰些詣饗伊綾膺瘡痲愈馴馴藤智叱堺糞轟糞漱熾頂嗜薰詫與蒙磐管苔翠塵鉦曙錫坐忽勾姑隙隈砧鴨兒芥

俄霞伽鶯於燕卯帖旭貞

(19) 矢野 (1987) には為永春水『春色恵の花』初編にみられる813字が、また彦坂 (1987) には『日本古典文学大系』に収められた洒落本6種にみられる1391字が掲げられている。

【参考文献】

- 天野晴子 (1998) 『女子消息型往来に関する研究——江戸時代における女子教育史の一環として——』風間書房
- 石川謙・石川松太郎編 (1973) 『日本教科書大系 往来編 第十五卷 女子用』講談社
- 国立国語研究所 (1963) 『雑誌九十種の用語用字 (二)』秀英出版
- 国立国語研究所 (1978) 『現代新聞の漢字』秀英出版
- 小松寿雄 (1985) 『江戸時代の国語 江戸語』東京堂出版
- 小松寿雄 (1987) 『滑稽本の漢字』『漢字講座7 近世の漢字とことば』明治書院
- 柴 桂子 (1990) 『旅日記から見た近世女性の一考察』『江戸時代の女性たち』吉川弘文館
- 神保五弥 (1958) 『化政度・天保期の江戸小説の作者と読者——人情本・滑稽本・合巻について——』『文学』26-5
- 野間光辰 (1958) 『浮世草子の読者層』『文学』26-5
- 彦坂佳宣 (1987) 『洒落本の漢字』『漢字講座7 近世の漢字とことば』明治書院
- 前田映子 (1995) 『近世 女人の書』淡交社
- 真下三郎 (1976) 『近世の国語教育』『復刻文化庁国語シリーズⅢ 国語改善と教育』教育出版
- 宗政五十緒 (1977) 『識字傾向と出版活動』『言語』13-12
- 矢野 準 (1983) 『黄表紙に於ける表記法——二十種黄表紙類の使用漢字——』『国語国文研究と教育』12
- 矢野 準 (1987) 『人情本の漢字』『漢字講座7 近世の漢字とことば』明治書院
- 矢野 準 (1994) 『一九黄表紙に於ける漢字 (一)』『香椎潟』39
- 永井悦子 (2003) 『女子用消息型往来における基本漢字抽出の試み』『計量国語学』24-2